

EXP × 1 0

WZ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

俺はクラスメートと突然、神と名乗るものに異世界に飛ばされてしまった!!

その神によれば、その世界はモンスターとそれを討伐するハンターが住まう世界らしい。なんかゲームみてえな世界だな？

ただし世界のバランスが崩れ、ハンターは新天地を求め新大陸を開拓することになったとのこと。その支援をどうやら俺たちにしてもらいたいんだとさ。

さらにその世界に行くにあたって、その世界の住人とは別に加護が与えてくれるらしい。さすが神様さまさまだぜ!!

それで俺の加護ってどんな効果よ??ええっ?!取得経験値10倍だって!?!まじかよ!

俺つえーとか出来ちゃう系のなろう系ですか?? やったぜ☆

だけどこの時はこの世界がどれほど過酷で、小説の主人公のように全てが上手くいく事がないことをまだ知らなかった。

そしてその自分の加護により、友人を、親友を、そしてその身さえも傷つける事を知らない。

そうこれはファンタジーな世界で、現実を突き付けられるそんな話。

※この世界は、モンスターハンターに似て非なるものになります。

特にアイテムの概念（所持数や効果等）や力尽きた時などの描写、スキル。

さらに作者は物書きに対しては、初心者なので更新速度、文字数などは察してください。

目次

1 一番近くにあったはずの遠い日々。

1

それは頼みではなく、強制であつた。

5

1番近くにあったはずの遠い日々。

…何回目だろう。

この色褪^あせた世界を見るのは。

そんな機械じみた世界をなぞるのを。

自分が世界の歯車になり、日常という名の世界を回す。

そこに正解があるのかも分からず、空回りする日々。

もしかしたら間違えているのかもしれない。

だけど、進めてしまえば止まらない。止められない。

一度決めてしまえば戻れない。

それが間違えた答えだとしても…

「おい、どうした？ぼーつとして」

「あ、ああ、なんでもないよ。考えことしてた」

「ん？そうか、ならいいんだけどよ」

少し不思議そうに首を傾げる友人、それに対して本当にぼーつとしていたことをよくある言い訳で乗り切る自分。

「で、何の話だっけ？」

「おい！やつぱ聞いてないじゃねーか!!」

「・・・いやあ。俺には関係ない話だと思ってさ・・・はは。」

「確かにそうかもしれないけどよ。妄想を語るぐらい良いだろ？」

そういえば、たしかそんな話をしていたなど再確認することが出来た俺は、

「まあ確かに、そんな世界があつたらいいよな。」

そう適当に返事を返す。

この友人こと佐藤達也は俺と同じ高校に通う幼馴染で、家が近く何かと共に行動することが多い。

特に理由があつていつも一緒にいるわけではなく、ぶつちやけただけの腐れ縁である。

あちらも同じことを思っており、他のクラスメートといるよりも心地が良かったりするがそれを言う調子に乗るのでここだけの秘密。

俺とは違いのムードメイカーであり、特定のひとしかあまり話さない自分と比べべかり、社交的で明るい性格だ。

「おいおい。そんな夢のない事言うなよ。たしかに佑斗から借りた小説みたいにファンタジーな世界なんてあるなんて思っただけだし、あつたらいいなと思うぐらい良くないか？」

「別にファンタジーに夢を見るのは良いけどさ、今週末のテストは大丈夫？小説なんて読んで。」

「うっ!!きゅ、急に現実見せんよ。妄想と現実の温度の落差で風邪ひくわ!!!…ん？風邪ひいたってことにして休めばいいのか…?」

「いいわけないだろ…。」

（なんかいい事思いついた! って顔してるけど、それじゃどのみち補習か再試だろうな。まあすっかりテスト受けても赤点だろうけど。）

「はあ。」

そんなアホな事を考えている友人を尻目に、俺は学校に向かうことにした。

この時まででは、小説のようなファンタジーは夢もの語りで、自分には関係無いものだと。

妄想は、仮想は、現実ではなく。今いる現実が全てで。

自分とは他者に生かされ、特別な人間にはなれない。そんな生き方しか出来ない。

他人の人生に関わる事ことも、干渉することもできない、そんなちっぽけな存在だ。ただどそれはそんなものだ、自分の事なのにまるで他人事のように自分を見ていた。

そう。この時まででは。

それは頼みではなく、強制であつた。

俺たちはそんな他愛ない話をしていると、学校に近づいていっているかなのか否か、我々が本校の生徒がちらほらと増えてきた。

自分の家と高校が駅を挟んでいる立地にあることも関係していることもあり、このあたりから人が増えはじめる。今日に限っては、丁度電車の時間も重なつたようでそこそこ多い。

俺たちの住むこの地域は、一般的に田舎と認識される立ち位置で電車も一時間に一本のみと言う不便極まりない場所である。まあ通学と帰宅の時間帯に関しては、本数が増えているが。

しかしやはり駅から出てくるの人は、ある程度纏まつて出てくるようである。今回はそれに当たつたようだ。

すると、その人混みの中から人を掻き分けこちらに寄ってくる人影が見えた。

「よう、佑斗に達也。おはようさん！」

「ちよつと待つてよー！一輝いゝ！速いよゝゝ」

そう声をかけてくる二人組。

この二人は、高校からの友達で最初に声をかけてきたのは齋藤一輝。こいつは筋トレ趣味のガチムチ野郎。

その次に声をかけてきたのは、少し背が低く小動物のような装いの奴は橘巧巳。この二人は俺たちのように幼馴染のようで、よく一緒にいることが多い。そのせいかクラス的女子（腐敗臭のする）の妄想を加速させていたりしているとかなんとか。

「ああ。おはよう。二人とも」

「ん？どうした？相棒が唸っているようだけど…」

「んー？まあいつものやつだよ。」

一輝の問いにまだテストの事を引きずっている相方アホのことをほっておいて答える。

「あ、そうか。今週末テストだもんね」

「そういうこと。」

「でもそういう古賀くんも大丈夫なの？」

「まあ、今回のテストに関しては期末テストもないし、範囲は狭いから授業をしっかりと聞いていけば大丈夫だよ。こいつと違って」

「そうだよね…ははは…」

困ったように頬をかく橘。

それもそうなのだ。別に大きなテストでもないので、授業をしつかりと聞いていけば

先生がどこがテストに出るかなどヒントを出してくれているわけで、

(なんでこいつは、運動はできるのに勉強に関して是不器用なのか… はあ。)

しかしそんなことは付き合いの長い俺が一番わかっていることであり、補習にならないために俺にすがってこくることも知っている。そのせいかノートのまとめ方がうまくなったなんてとんだ笑い話だが、他人に教えることにより、より一層理解が深まるのである意味良い関係なのかもしれない。認めたくはないが。

そんなことを考えながら一輝と巧巳とテストの範囲を確認しながら学校に向かっていくと、突如後頭部を殴られたようなそんな衝撃を感じた。

フラツとする頭、白く霞む視界。

体から力が抜ける感覚を感じながら、まるでボールの中に入れられ思い切り振られていくそんな感覚を覚えながら、意識を手放していく――。

ここは…？どこだ？

眩む視界から必死に情報を掴み取ろうとする。

見える人影は6人。他には何も無い。そう『何も』ないのである。

そこには、日常という枠組みから自分たちだけが切り取られているようなそんな場所。

ここにいるだけで方向感覚どころか上下の感覚まで狂いそうになる。今まで感じたことの無い感覚に脳の処理が追い付いてないのか、はたまた目が覚めたばかりで状況が読めていないだけなのか。

だけど脳が覚醒するにあたって分かることは、ここには何も無いと言うこと。

白。シロ。しろ——。

全くもって見渡す限りの白。まるでここに居る自分たちのほうが異常に思えるほどの白。

「お、おい。佑斗大丈夫か？」

ふと隣から声を掛けられる。そこには見慣れた幼馴染が心配そうにしていた。よく見れば先ほどもまで話をしていた一輝と巧巳もいた。他には自分と同じクラスの女子の3人もいた。

一体どれほどこの状況を理解する為に放心していたのであろう。もはや時間という概念があるのかもわからないこの場所で。

『やあ。お目覚めかね？』

唐突に脳に響く声。その声はどこかで聞いたことのあるような、しかし初めて聞くような不思議な声だった。

『驚くのには無理はない。何せここは現実ではないのだから。』

(何を言っている？現実ではない？じゃあここは、この場所は何だと言うのだ？)

ただただ不安しか感じられない。見えないものから声をかけられているのだ、落ち着けというには無理がある。

『それについては、夢の中にいるような物だと思ってくれて良い。』

「っ!?なんで分かった!?声には出してないはずだ!」

思わずそう叫んでしまった。それは不安感からくる怒りなのか、音のない場所なのに声だけが脳に響いてくる違和感からなのか、しかし叫ばずにはいられなかった。

少しでもこの違和感を消すために。自分の心を保つために。

『それについては、君の心を読んでいるからだよ。』

「こ、心を…?」

『そうだよ。しかし君は心のバランスを取るのが上手のようだ。ここに来る人の子は大抵自分の置かれている状況を理解する事に精一杯だからね。』

「そんなことはどうでもいい!ここはどこなんだ!」

『まあまあ、そんなに急ぐこともないだろ?まあここがどこかと言えば神々が集う場所、

人間が言うところの天界とでも言っておこう。』

「天界？ 神？ じゃあ自分は神だとも言うのか？」

『そう捉えてもらって構わないよ。』

なるほど、この神？ によればここは天界らしい。たしかにこれほど現実離れしている場所であれば納得しざるおえない。

「あ、あの!! じゃああなたは神様で、ここが天界なら！ わ、私たちは死んでしまったのでしようか!？」

そう神に問いかけるのは、同じクラスの委員長である本城史織。

肩まで伸ばした黒髪に左側に飾り気のない黒いゴムでサイドテールをしている少女。

その目には不安と恐怖に涙を浮かべているが、確かに芯の強さを伺えるそんな光があつた。

『それについては君たちはまだ死んではいけないよ。仮死状態と言えいいのか？ この天界と繋がるための処置だね。まあ次に目を覚ました時には夢を見ていた、そう思うだけだよ。』

「そ、そうですか...」

委員長はどこかほっとした顔をした。

「なるほど大体ここがどこなのか分かった。じゃあなんでここに連れてきた？」

『確かにそれが一番大切なことで、聞きたいことだらうね。』

先ほどまで黙って聞いていた一輝が口を開いた。

『君たちをここに呼んだのは他でもない。頼み事があるからだよ。』

「その頼み事とは？」

『ある世界の調整——かな？』

「調整？」

『そう。その世界にはモンスターと呼ばれる生き物が住み、それを狩る人の子が住まう世界。しかしその世界は不安定でね、どうしてもバランスを取るのが難しい。その為人の子に神託を与えた。』

「神託？何を言ったんだ？」

『新大陸を目指せ、そう一言伝えた。それにより人々には新たな生活圏が広がり、モンスターの理解が深まることによる共存への道を。』

「じゃあその新大陸への進出を手伝うことが頼みってことか？」

『理解が早くて助かる。』

まあ頼みはそれだけではないがな、とそう付け加える神。

『真の頼みと言うのは、その開拓において君らの後に送る人々の居住環境の確保である。』

「じゃあ俺たちの後にも異世界人を送る気なのか」

『左様。因みに送るのは、君らの通う学校の者を使うものとする。その方が知らない者と関わるよりも楽であろう?』

(ああこれじゃまるで俺たちは、実戦配備する前に試して送られる一番槍つてことかよ) 『仕方ないだろう?安全を確認出来ていないのに悪戯に死んで貰っては困る。』

「じゃあ俺たちのいいのかよ?」

『それについては安心してほしい。世界のバランスを崩さない程度に私から加護を与えてやろう。』

そういうと自分の体から温かなものを感じた。

『その加護はその世界の住人とは別に与えられる加護。その世界とは別に働く加護である。さらに目的を見事達成した暁には、なんでも褒美をあたえる。』

そしてこの神が言うには、

その世界は元々人の子が作った遊戯を参考に作った世界であり、ここの住人はそこそこ頑丈であるため、それに合わせて俺たちの体も調整してくれるらしい。

さらに死んでも日に10回までなら復活でき(異世界人のみ)その際復活するのは、日の始まりになるとのこと。

『では、人の子よ。我が世界の繁栄の為に尽力を尽くすことを期待しておる。』

13 それは頼みではなく、強制であった。

その言葉を最後に俺たちは再び意識を手放した——。